

「キンダートランスポート文学」 としての *Latecomers*

河野哲子

第2次世界大戦勃発直前、ナチス政権下のドイツから、およそ1万人のユダヤ人の子どもたちがイギリスへ疎開した。これを「キンダートランスポート」とよぶ。歴史家の定義によると、キンダートランスポートとは、「1938年12月から39年9月3日のイギリスの対独宣戦布告の日までの9ヶ月間に、9354人という1万人近くの生後2ヶ月の赤ん坊から16歳までの子どもが、親と別れて子どもだけの集団でドイツからイギリスにわたってきたこと」を指す(木畑 3)。この疎開の直接の引き金となったのは38年11月9日のクリスタルナハト(水晶の夜)であった。ドイツ全土でユダヤ人の商店や家が襲撃され、割れたガラスが街路をうめた様子からその名がついた事件である。33年のドイツ第三帝国成立以来、これ以前にもドイツ系ユダヤ人に亡命の動きはあったが、彼らはクリスタルナハトで深刻な生命の危機を感じて初めて、子どもだけを、海外の宗教や言語の違う人々に託す決心をしたのである¹。

このキンダートランスポートをめぐる文学作品としては、フィクション・ノンフィクションのいずれも存在し、表現形式も、散文(回想録・ルポルタージュ・小説)、詩、戯曲と多岐にわたっている。本稿ではこれらをまとめて、「キンダートランスポート文学」と定義したい²。それは「ホロコースト文学」のサブジャンルとして位置づけることが可能で、中には実際に『ホロコースト文学事典』に記載されている作品もある³。ただし、基本的にはドイツにおけるユダヤ人迫害が激化すると同時に出国した人々の記録、あるいは物語であるため、クリスタルナハト以後にドイツでおきたことには言及が少なく、戦中・戦後のイギリスでの暮らしに関わる描写が大部分を占めている。テーマとしては、両親の思

い出(両親と別れた日の記憶), カルチャーショック(ドイツで裕福な家庭に育ったキンダーは新生活の質素さに驚愕した。ドイツの都市と, 里親の住まいがあったイギリスの田園地帯とのギャップも大きかった), フォスターファミリーとの摩擦, 学校での適応の困難さ, 家族の中で自分だけが生き延びてしまったという罪悪感, 過去の克服, 経済的自立への奮闘努力やイギリス社会への同化などが中心となっている。

本稿で採り上げる Anita Brookner の *Latecomers* の舞台は 80 年代のロンドンであるが, 二人の主人公はキンダートランスポートで渡英したユダヤ人である。Jew (ish) という単語はほとんど使われることなく彼らの境遇が語られ, キンダートランスポート, ホロコースト, ナチスという用語にいたってはまったく言及がない。読者は主人公二人が置かれた状況について, ごく断片的な情報を作家から与えられるのみである。しかし, 後に指摘するように, この作品にはキンダートランスポート文学に共通して見られるテーマが随所に盛り込まれており, 主に 90 年代初頭から増加するキンダートランスポート関連の出版物の一つと見なすことが可能である。この小説を「キンダートランスポート文学」の先駆的作品として読み直すことで, 新たに見えてくる作品の意味を検討し, そこにポーランド系ユダヤ人であるブルックナーの出自がどう影響しているかを考察するのが本稿の目的である。

Latecomers が出版された 1988 年は, かつてのキンダーにとって大きな節目となる時期であった。89 年がキンダーの最初の渡英から 50 周年にあたり, 記念集会在ロンドンで開かれたが, それ以前は当事者であるキンダーでさえもキンダートランスポートの全貌を知らなかった。集会の呼びかけ人である Berta Leverton は共にイギリスにやってきた友人に電話でこう語っている。

'Ilse, I'm going to make a get-together, a reunion of the *Kinder* from fifty years ago. Do you realize it's forty-nine years we've been in this country and nowhere in the *Jewish Chronicle* or anywhere in the press is any mention of the *Kindertransport*?' (Harris 252)

渡英した子どもや入国直後の宿舎の総数を知り、かつての友人と再会したい、という願いのもとに Leverton は活動を開始する。その結果、記念集会が開かれただけでなく、Reunion of Kindertransport という団体も設立される。以後、これまで沈黙を守ってきたキンダーの多くが積極的に自らの体験を語りはじめ、手記だけでなく、ドキュメンタリーも制作されるようになる。ブルックナーが *Latecomers* を執筆していたのは、こうした動きが表面化する直前であった。“I get told a lot of things, and I do a lot of listening. Other people’s stories seem so much more urgent than one’s own, with much more reality somehow.” (Haffenden 60) と語るブルックナーが身近にいたナチス難民から直に体験を聴取した可能性は高い。作家独自の取材を経て描き出された二人のキンダーの人物像はどのようなものだったのか、キンダートランスポートに共通して見られるテーマに沿って検証する。

両親の思い出

二人の主人公のうち、世渡り上手で明るい性格の持ち主と思われる Thomas Hartman は、ミュンヘンでは乳母もいる裕福な家庭の出であった。彼はいっしょに買い物をした父が、豪華な店で「パイナップル一個と桃一箱」をステッキで指して、車に運ばせた光景をはっきり覚えている。これ以外に、乳母に連れられて Englische Garten を散歩したり、Nymphenburg で初恋の女の子と遊んだという思い出が語られる(7)。渡英したのが12歳のことなので(13)、それ以前の生活について具体的に覚えていても不思議はない。しかし、彼の両親の連行に関しては、描写が突然わかりにくいものになる。

He did not remember, because he had never witnessed the event, his elegant parents dressed for some *fête-champêtre*, being hoisted, slightly puzzled, on to farm carts, but behaving with good grace, thinking this part of the entertainment. They were driven off never to be seen again, but how could he know that? How could one remember absence? Was

it not one's duty to fill the void, when there were so many agreeable ways to do so? (7-8)

ここに描かれているのは、ナチに追い立てられて荷車に乗せられた一組の夫婦の姿である。読者がそう判断するのは、「彼らは連れ去られて二度とその姿を見ることはなかった」という一文があるからだ。しかし状況説明が不足しているためにいくつかの疑問が残る。まず子どもでもあるハートマンがその場にいない理由が不明である。学校に行っていた、どこかに隠れていた、という可能性も皆無ではないが、車上の両親の「かすかに戸惑った」表情や、「優雅な立ち居振る舞い」が不自然である。わが子を孤児にする予感があるとき、親として平静を保つのは困難であるからだ。そこで両親の連行がハートマンの渡英後におきたと推定できる。ハートマンのイギリスでの里親は Aunt Marie で、縁故疎開の部類にはいり、それはあらかじめ両親によって渡英後の保証人の手配が行われていなければ実現しない（木畑 33）。つまりハートマンの両親はわが子を救うために最善の努力をして無事にイギリスへ送り出したあと、自らの命運については諦観をもって荷車に乗ったのである。この解釈を選ぶときに残る疑問は、ハートマンが両親と最後に別れたのはいつなのかというものだ。後に引用するように、もう一人の主人公 Thomas Fibich にとっては、駅での両親との別れが後の人生で決定的な影響を持つほど強烈な体験であった。ハートマンに関しては、この連行の場面以外に両親との別離に言及する箇所がない。したがって彼が両親と実際に別れた日の記憶はまったく別なもので、つらさのあまり抑圧しているため彼の意識にのぼらないか、親が平静を装ったおかげで、記憶に残らないほど日常的な別れであったかのいずれかである。そして上記の連行の模様すべては知人からの伝聞によるもので、それが子ども向きに脚色されている可能性は十分考えられる。

たとえば、在英ユダヤ人作家の Eva Figs（彼女は親と共に開戦前に渡英しているので、キンダートランスポート体験者ではない）は、ちょうどハートマンと同じように子ども時代をドイツで過ごしているが、クリスタルナハトの最中にもその喧騒から完全に守られ、父親の逮捕も「仕事で出張」したことにされ

ていた。使用人たちは皆「嘘をつくよう指示されており、上手にそれをやりとげた」のである(13, 14)。彼女は後に真相を知るので、“My nursemaid, who later died of cholera in a concentration camp, organized a singsong in a backroom away from the street while the smashing and looting, the beating and killing, went on four floors below at street level.”(14)と言葉をついで、ナチスの暴虐にはっきり言及している。一方、作中人物のハートマンは、人から伝え聞いた話をそのまま回想の空白を埋めるために利用し、あえて疑問をさしはさもうとはしない。真相を究明して両親を奪われた悲しみを明確に意識するのをたくみに防いでいるのだ。作家もそこに注釈を加えないので、ハートマンの両親が果たして本当に上記のような牧歌的な状況のもとで連行されたかどうか曖昧なままである。また、連れ去られた二人を待ち受ける悲惨な最後についても、“never to be seen”という、きわめて簡潔な表現で記されている。*Latecomers* 以外の作品においてもブルックナーの語りには一貫して“reticence” (Sadler ix) がみられるが、この箇所ではその語りの特徴がハートマンの過去への姿勢に見事に一致しているのである⁴。

では、もう一人の主人公 Thomas Fibich についてはどうか。故郷ベルリンを後にしたとき7歳だった彼の記憶は、主に渡英後の落ち着き先に関わるもので占められる。肝心のドイツ時代の記憶は「失われて」おり、そのため彼は分析医に通っているが、経過は決してはかばかしいものではない。彼の内面は「自分は何者か」という悩みで満たされているが、分析医との面談を経ても「断片的で奇妙なイメージ」以上のものを得られない。ある種の恐怖感が彼の回想をブロックしていて、精神が膠着状態に陥っている。これを打開して記憶の回復という作業をさらに進めるためには、どうしても一度故郷ベルリンへ戻らなくてはならないという切羽詰った思いが生じていくことになる(33)。しかし、彼はこれまでの生涯で、自発的に何かを決断したことがない。このイギリスでの生活自体、彼の意味とは無関係に始まったものである。フィビッチはずるずると出発を先送りにして、それがさらに無力感と苦悩を深めていく。また、現在のやせ細った体とは違い、少年時代の彼は太っていて、食べ物について実際に事欠いた経験はないようだが、なぜか頭の中は「食べ物のことでいっぱいだっ

た」(34)。これだけは後に結婚したあとになっても続いている。彼にとって、ドイツでの幼少時代と、渡英後の自分がつながらないことが苦悩の一因であるが、唯一、つきまとう飢餓感だけが彼の人生の連続性を証明しているのである。

駅

ロンドンに着く以前のことは“a total blank”(141)とするフィビッチにはしかし、決定的な記憶がひとつだけある。それはベルリンの駅で両親と別れたときのもので、物語半ばすぎになってようやく明らかにされる。

... his mother, embracing him for the last time, had turned away and fainted into her husband's arms. As the train began to move off into the dark night, all that he could see was the turning and sinking motion of his mother, her face white, her eyes closed, falling lifeless into his father's arms. Vainly he had searched, through the open windows of the night express, for signs of her return to life, to her normal position; he wanted to see her eyes smiling at him once again, and his father waving reassuringly. But they had been attached to each other as a mourning group, with no thought for him, or so it seemed, and all that he had to comfort him was a packet of boiled sweets in his coat pocket, in case he felt sick on the boat, and the address of a school where a place had been found for him. (144-45)

列車は夜の闇の中に向かおうとしており、この家族を待ち受ける運命を象徴している。わが子を生かすための旅であっても、両親はこれが最後の別れになる可能性を予測している。一方、フィビッチにとって、行く手に広がる闇は自分の置かれた状況に対する完全な無知をあらわしている。若干7歳の子どもが、親と別れて自分だけが旅立たねばならない理由を理解できないだけでなく、目的は訪れたこともない外国なのだ。フィビッチの場合はハートマンと違い、

まったく縁故のない疎開であり、寄宿学校でハートマンと出会ったおかげでかろうじて休暇に帰る場所（マリー叔母の家）ができたのである(35)。したがって、旅立つ時点ではあとに残る両親のいる場所だけが彼の世界のすべてであった。しかし、母は彼を抱きしめた直後に顔をそむけて気絶し、父親はそれを抱きとめるのが精一杯で、もはや彼の方を向こうともしない。車窓から彼が最後に見たのは「喪に服す」二人の姿であった。

こうした記憶のおかげで、彼は今でも駅そのものにオブセッションがあり、たとえ行く先が行楽地であっても、プラットホームに立てば「落ち着かない気持ち」(145)になって、自分自身と葛藤しなくてはならない。また、甘党で、お菓子やでんぷん質のものは何でもむさぼるように食べるフィビッチだが、自分の家に飴玉 (boiled sweets) をおくことだけは我慢ならないのだった(146)。トラウマになった駅での体験で、フィビッチに二つの方向にむかう感情が生じたと考えられる。一つは、気絶するほどの悲しみにくれた母を気遣い、慕う気持ちである。意識を失った母を置き去りにして旅立ち、結果として自分だけが生き延びてしまう。母への思慕は後に *survivor guilt* へと結びついていく。しかしその一方で、寄り添いあう両親の姿を目にしたとき彼が覚えたのは強い疎外感であった。二人のあいだに彼が入り込む隙間はなく、あたかも自分が親に葬り去られてしまうような錯覚をおぼえたのである。死が待ち受けていたのは両親の方であることなど、7歳の少年に予測できるはずもない。その後長い間、飴玉を嫌悪する気持ちの中には、疎外感と張りついた両親への怒り、恨みが隠されているのだ。

ここで描かれる別れの場面は、あくまでフィビッチの偏った記憶に基づくものであるが、キンダーの手記を読むと、ある時期から親のプラットホームでの見送りが禁止されていた地域があったことがわかる。親が泣いてしまったり、実際に気絶してしまったりするケースがあり、それ以後、混乱やトラブルを避けるために禁止されたのである。駅に立ち入ることすら許されず、コミュニティオフィスで子どもと別れた親もあった。親を残して列車に乗ったキンダーの心中も当然複雑で、ふだん気丈だった母がいきなり駅で感情的になったのを目の当たりにしたある女性は、“The parting was terrible. That’s the one thing

I've never forgotten in all my life.” (Harris 109) と述べている。彼女の場合はこのときの心の傷が今も癒されているとは思われない。また、微笑みながら自分を列車に乗せてくれたはずの両親が泣きながら列車を追いかけてくるのを見た別の女性は、“... these people really love me. This is why they're sending me away.” (Harris 111) と悟り、出発前に「自分を追い出そうとしている」と親をなじったことをわびる手紙をすぐに車中で書いた。ただ、こういう認識に早くも旅の途中で到達した子どもはごくまれで、プラットフォームを歩きだしたあたりからいきなり記憶がなくなっていたり (Harris 102)、そもそも別れの時のことをあまり覚えていないために、その後の人生でそれを不思議に思ったりするのだった (Fox 64)。また、出発間際まで親たちがなるべく普段通りに振舞ったので、駅に集められた以前のことを思い出せないのかもしれない、と分析するジャーナリストもいる (Turner 1)。

なお、ゼーバルトの『アウステルリッツ』においても主人公の駅に対する強いこだわりが描かれおり、キンダーにとって駅での体験が生涯にわたるインパクトをもつものであることを反映している⁵。駅はあとに残していく世界と、新たに入っていく世界の接点であり、主人公はそのいずれにも属することのできない、自己の存在の不確かさを味わう。ただし、ゼーバルトの場合は、それで作品の価値が下がるわけではないが、ブルックナーに比べて物語を作りすぎているという傾向が見られる。主人公は駅への強いオブセッションもひきがねとなって失われた記憶を取り戻し、読者はミステリの謎解きの部分を読むように物語の後半を読み進むことになる。主人公が疎開してきたユダヤ人の子どもであるという設定が、読者の関心を維持するために利用されている面が見られる。

戦時下のイギリスでの学校生活

ハートマンは里親となった叔母の家からすぐに寄宿学校にやられてしまう。彼はそれを「裏切り」と考え、学校生活は耐え難いものであった。

Had it not been for the accident of being paired with Fibich—but both

were forbidden to speak German—he would have died or killed himself. Only the knowledge that someone else’s experience reflected his own reality saved him.... (10)

家族と離れただけでなく、母国語を禁じられたことが、ハートマンにとって大きな打撃になる。言葉がわからないことで集団から疎外されているという意識はいっそう強められ、帰属すべき場を失ってしまうのである。同じ境遇をもつフィビッシと出会っていなければ自殺する可能性すらあった。フィビッシの苦境を目の当たりにして初めてハートマンは自分の状況を客観的に眺められるようになり、フィビッシとの間に家族の絆と呼びうる結びつきが生じる。年齢的にもハートマンが上で、一貫して保護者代わりの兄のように振舞ってはいるが、この箇所を読むと、存在のぎりぎりのところで、ハートマンの方がフィビッシを必要としていたことがわかる。また、青年期にハートマンを蝕んでいた「おびえ」を最初に克服していくきっかけが、英語の習得であったことも特筆に値する。学校を出る所に急速に言葉を身につけていった彼は、突然今までになかった能力がめざめるのを感じたのだった(14)。

言葉の問題は ethnic identity ともっとも密接に結びついている。当時のキンダーのなかには、渡英以来、一切ドイツ語を話さなくなって忘れてしまい、その後再学習の機会もなかったことを残念に思っている人 (Harris 126) や、自分より1年早く渡英した子どもが母国語であるチェコ語をほとんど話せなくなっているのに接して「恐怖にかられた」(Harris 130) と述懐する人もいる。ホストカントリーであるイギリスに適応するプロセスは、母国語と ethnic identity を失う過程だったのである。彼らの場合、渡英後、終戦を待たずにこのプロセスは一応の完成をみて、後戻りはしかなかったのであった。

言葉や生活習慣の違い以外に、キンダーの手記でしばしば言及されているのは、母国とイギリスの気候の違いである。イギリスの霧、特に冬の寒さと湿度は彼らには不快であり (Fox 72)、自然に親しんだという記述は例外的である。ハートマンも学校が「荒涼としてじめじめしたサリーの田舎」(11) にあって屋外を走らされたことなどがいやで、それが後にロンドンに強い愛着をしめす原因

となっている。

戦後の暮らしと結婚

戦後学校を出た彼らは、ともに印刷工の徒弟になるが、両親の死を知らされていくばくかの遺産と戦後の補償金を得る。これを元手にグリーティングカードの制作販売というビジネスを起し、成功をおさめる。早くに家族を失った埋め合わせをするように、オフィスはとにかく「家庭的」なものであるよう気を配るが、彼らは決して後ろを振り返らず(15)、両親の死のいきさつを確かめようという試みもまったくなされない。経済的に安定すると結婚するが、主人公たちの妻 Yvette と Christine には、それぞれにふさわしい過去と性質がある。まず、ハートマンの妻イヴェットは、外見に常に気を配り、あまり内省的なところはみられない。彼女は幼いころ自分の母親とパリからボルドーへ逃げるように旅をした記憶がかすかにあるが、その旅の理由を知るのは、自分たちの娘 Marianne が結婚し、いわゆる空の巣症候群といえる状態になってからである。そこで明らかになる真相は、彼女の反ユダヤ主義の父親がナチス協力者だったので地元住民にリンチで殺され、当時2歳だった彼女と母親は命からがら逃げ出した、というものであった。いっしょに話をきいていたハートマンは「首のうしろの毛が逆立つ」のを感じるが、イヴェットは父親がハンサムな画商だったという点だけをとらえて“*That must be where I get my taste from.*” (164)とコメントして話はそこで終わるのである。これはハートマンが自らに課してきた記憶のスクリーニングという行為を極端に戯画化したものといえる。そして、イヴェットが本当に親から受け継いだものは、「人生の初期に被った損害を全力で補填した」(164)母親のしたたかさであり、それはハートマンにとっても不可欠なものだったのである。

一方、フィビッヒの妻クリスティンは、生後まもなく母を病で失い、以後、継母と父のもとで暮らす。その家庭は決して温かいものではなく、父親も病死すると、あっさり継母に捨てられてしまう。4人の主要な登場人物の中で、彼女だけが戦争の影と無縁であるが、孤児として生まれたといっても過言ではな

いくらい、家族には恵まれなかった。それを過剰に補うようなかたちで家事を覚えるが、中でも料理の腕前をあげていく。ブルックナーの作品において料理を作って人に食べさせるという営みは大きな意味をもつが⁶ *Latecomers* ではクリスティンが主にその行為を司り、家族だけでなく、後には息子 Toto の友人にも手料理をふるまっている。先に述べたように、フィビッチは一貫して飢餓感にとりつかれているので、その彼が料理上手の女性と結婚するのは最上の組み合わせであるはずだが、二人が実際に結婚生活に入ってもなぜか幸福は訪れない。解決されていないフィビッチの問題がクリスティンにも転移して、彼女まで自分が *outsider* であるような心境になってしまうのだ(59)。

帰郷と過去の克服

今や60歳をすぎたハートマンが運命とうまく折り合いをつけるために心がけてきたのは、「望ましくないもの」「やりそこねたこと」「人間の手には負えないショック」を“screen out”「排除する」(7)ことだった。それは成功しているかに見えるが、彼は常に自己の内面に検閲をかけ、そこで抑圧した記憶が夢に出てきたりしないように、睡眠薬を毎晩服用して夢さえ見ないようにしている。容姿へのこだわりや、毎日のちょっとぜいたくで「儀式的な」ランチも、すべては自分の心に隙をつくらないための術である(6-7)。そしてハートマンはフィビッチに対しても「検閲」をかけて、過去におしつぶされそうになる彼を現在にひきもどそうとする。ただし、「もう終わったんだ」とつぶやくハートマンの表情には、「当人も気づいていない深い疲労の色」があらわれている(11)。

一方、フィビッチの場合は、過去の喪失が「インクのしみのように」人生全体を染めているので、地理的、歴史的なレベルで自分の過去についての情報を取り戻したいと切望する。故郷ベルリンでかつての隣人に自分を見て思い出してもらうことで、アイデンティティを確立したいのだ(143)。そして長い逡巡の後ベルリン行きを決めるが、その最大のきっかけは、一人息子 Toto(Thomas)の成長であった。フィビッチは自らのアイデンティティを確立した上で、息子に“roots, a family, an inheritance”(193)を与えたいと思ったのである。

一方、ハートマンはフィビッチがベルリン行きチケットと宿の手配をしたとわかれると、あっさり「共謀関係」に入り、妻たちには一切旅行の本当の目的を話さない。それが「あまりに重大で歴史的」であるため、第三者には説明不能だと考えるからだ(189)。対照的な後半生を歩んできたかに見えた二人だったが、結局同じ価値観のもとに生きてきたことがここで明らかになる。Thomas という同じファーストネームをもつ彼らは“metaphorically and almost physically twin souls”(12)であって、互いの姿を映しあう、鏡にも似た存在なのだ。出会って以来、二人は故郷喪失者としての苦悩を共有してきたが、フィビッチだけがそれを表面に出して救済への道を模索していた。ハートマンは自己検閲の末、巧みに苦悩を抑圧していたが、それも限界であることに気づき始めていたのである。彼は自らの心の救済をフィビッチのベルリン行きに賭けたのであった。

しかし、ベルリンでのフィビッチの経験は、anticlimax といえる代物である。そもそもあたりの雰囲気、“savourless air”(193)はまったく彼になじみのないものであった。いくつかの場所に覚えがあるように感じるが、どこへ行くべきか途方にくれ、「外国に来た旅行者は何をするのだろうか」と考えてガイドブックを買い、それを参考に行く先を決めている始末。出てくるドイツ語も「普通の旅行者」が話すレベルである(196)。ただ、ホテルでの眠りだけがいつになく深く、朝目覚めるたびに「ここに来ても死んでいない」と自覚する(198)。悲壮な決意とともにベルリンを訪れた彼としては、なんとしても“that illumination, that shock of recognition that would tell him that he had come home”(199)を見出したいくて、東ベルリンへ向かう。境界駅である Friedrichstrasse では、かつてドイツを出るときに体験した混雑を思い出したのか、パニックにおちいりそうになるが、そこも無事通過し、「この小旅行から得られるものがあるとすれば、恐れ、疎外感、強い郷愁と向き合っても、なんとか立っていられる、それで死んだりほしくないということだ」と自らに言い聞かせる(200)。それは彼が期待したような認識や啓示とは程遠いが、なぜか満足し、「生涯にわたって背負ってきた重荷や恐れから解き放たれた」と感じる。このあと、自分の両親や今の家族、家族同様のハートマン一家のことが頭を去来するが、いずれにしても自分に

都合のよい解釈を思いつき、「時間がすべてをおさめてくれる」と納得する(201)。旅の間に彼が両親の消息に関してなんらかの調査をしたかどうかは、まったく言及がない。しかし彼の苦悩がたった2, 3日の旅では解決しないことはすぐに明らかになる。ヒースロー空港の雑踏で夫の腕に気絶する女性の姿を見て、あの決定的な体験を思い出したフィビッチは迎えに来たハートマンの腕に倒れこんでしまうのだ(205)。それ以後、彼は長期にわたって一種のうつ状態に陥ってしまう。

フィビッチが長年求め続けた認識は、その重要性にふさわしくない場所で訪れる。彼を叱咤激励しようとするハートマンに誘われた昼食の席で、フィビッチは *nervous breakdown* といえる症状を呈する。と同時に“I should have gone back. I should not have left. I should have got off the train.”と自らの *survivor guilt* を初めて口にする(215)。その後ハートマンに伴われて乗ったタクシーの中で次のように悟る。

... the homesickness that had afflicted him in Berlin had nothing to do with any home that he had ever known, but rather as if his place was eternally elsewhere, and as if, displaced as he was, he was only safe when he was fast asleep. (220)

今まで追い求めてきた本当の home は具体的な場所のことでなく、永遠に「どこか別のところ」にある幻想にすぎないのだ。そして「深い眠り」、おそらく「死」だけが、故郷喪失者としての不安定さから彼を解放してくれるのである。そのような認識を経てもフィビッチが絶望しないのは、自分が本質的に、ひとつの状態に甘んじていられない人間であることを初めて受け入れることができたからだ。「安全になりさえすればいい、安全になれば自由に、自由になれば勇敢になれたらいいのに」(220)と思うような自分をありのまま認めたのである。変化と流転の中にこそ、彼が身をおくべきところがあったのだ。こうした心境に至った彼に初めて安らぎが訪れる。ミュンヘン時代の思い出話を持ち出したハートマンをさえぎるフィビッチは、ハートマンの役割を演じているよう

だ。友の昔語りを制して、無害なはずの回想が現在に影響力をもつような事態を防いできたのは常にハートマンの方であった。

なお、66年に出版された匿名の回想録集 *We Came as Children* と、2000年に出た *Into the Arms of Strangers* には、キンダーの帰郷のエピソードを含む章がある。そのタイトルが“Facing the Past”から“Living with the Past”に移り変わっている点も示唆に富むが、前者は特に、かつての故郷に足を踏み入れたキンダーの複雑な心境を生々しく綴っている。キンダーの多くは、故郷で両親の消息（収容所への移送や収容所での最後のもようなども含めて）を調べたに違いないが、そのプロセスが詳しく手記に記されていることはまれである。そして主人公フィビッチがベルリン滞在中に何をしたのかも、実はよくわからない。Skinner はこれをブルックナー特有の“mysterious refusal of employment”の顕著な例(139)として指摘するが、上記の手記と *Latecomers* とを読み比べると、あらためてブルックナーの徹底した写実主義に驚かされる。彼女の語りに見られる饒舌と寡黙のバランスが、実際のキンダーのそれと一致しているからだ。

Latecomers はしかし、二人のキンダーの単なる克明な肖像画であるだけではない。作者ブルックナーの出自が語りに及ぼしている影響を無視することはできないのである。

アニタ・ブルックナーの出自と *Latecomers*

アニタ・ブルックナーは、ロンドンで生まれたが、両親はポーランド系ユダヤ人であった⁷。父親が第一次世界大戦直前、母方の祖父が19世紀末にヨーロッパからイギリスにやってきたので、いずれもナチズムから逃れての亡命ではない。ただし、ロンドンでのブルックナー一家は、親戚や知人も時には同居する拡大家族の状態で生活しており、その中にはホロコーストを逃れて渡英してきた人も含まれていたようだ。そしてヨーロッパで営んでいた事業をこちらでも起こし、「大いに成功したファミリービジネス」(Haffenden 60)に従事していた。父親は戦間期にもすでにイギリスで顕著であった反ドイツ感情をうけて、

自らの姓を Bruckner から Brookner に変えている。ディケンズの作品をこよなく愛し、そこに描かれる「本当のイギリス」を教えるべく、一人娘が7歳になるとディケンズを読ませている。体力がないという理由で、彼女にヘブライ語習得の機会は与えられなかった。これについて彼女は、“I never learnt Hebrew.... I regret it, because I would like to be able to join in fully. Not that I am a believer, but I would like to be.”と語っている (Guppy 149)。在英ユダヤ人の大家族の中で育ちながらも、通った学校はイギリスのエリート子女のもので、知的バックグラウンドはユダヤ的な要素とイギリス的な要素をあわせもっていたと考えられる。

小説家としての地位を確立してからのブルックナーは、自らのユダヤ人としての出自や、英国ユダヤ人のあり方について、どのような考えをもっていたのだろう。インタビュー以外にも、二つの興味深い手がかりがある。ひとつは1989年の *Observer* に掲載された *The Club: The Jews of Modern Britain* (ブルックナーはこの本の中で英国ユダヤ人のすぐれた作家の一人に数えられている (Brook 324)) に対して彼女が書いた書評 (以下 Review) である。そこで彼女は、“The ideal Jew, perhaps, is the one who escapes all stereotypes and looks with an unprejudiced eye on what his life has to offer.” (Review) と述べている。この発言は、もうひとつの手がかりと結びつくものである。1996年、*Jewish Writers of the Twentieth Century* の編者 Sorrel Kerbel がブルックナーに関する論文を彼女に送ると、彼女はその論文をおもしろいとしながらも、「私はゲッターに入れられたくない」と返事を書いてきたのである⁸。「英国ユダヤ人作家」という枠付けを拒み、ステレオタイプから自由でありたいと彼女は願っているのだ。ヘブライ語習得に関するブルックナーのコメントでも明らかなように、自分がユダヤ人であることを恥じているわけではない。読者に偏見のない読みを期待し、自らはあくまで客観的に歴史事実を扱うという姿勢を貫きたいのである。

しかしブルックナーの思惑に反して、近年彼女はしばしば「英国ユダヤ人作家」として論じられ、そのときは必ずといっていいほど *Latecomers* が言及される。ユダヤ人難民が主人公で、ホロコーストが重要な背景になっていることが

はっきりしているからだ。(第5作目の *Family and Friends* にもナチス難民が描かれているが、*Latecomers* ほどそれを顕著にしていない。)そして彼女の他の作品にも一貫して見られる、多くを語らないスタイルは、ここで独特な評価を受けることになる。たとえば Bryan Cheyette は “As her novel *The Latecomers* demonstrates, Brookner’s reluctance to make her Jewishness usable in her fiction was, above all, self-conscious strategy.” (xli) と指摘する。ブルックナーが作中人物のユダヤ性をたくみにベールでおおうのは、広くイギリス人読者を獲得するための意識的な戦術であり、同化のために目立たない低姿勢をとるという英国イギリス人のあり方を反映するものだという指摘もある (Kerbel, “Embarrassment”)。あるいはアーロン・アップルフェルドが『バーデンハイム 1939』で試みたように、ホロコーストそのものに意図的に言及しないことで、特殊な効果をねらったものだと見なすことも可能だ⁹。

Latecomers を「キングートランスポート文学」のひとつとして読み解くと、上記のすべては、ブルックナーがかつてのキングーの後半生を忠実に再現した結果としておきたことにすぎないと考えることができる。7歳と12歳で祖国をあとにした主人公の口からは、ナチス批判や、ヨーロッパへの郷愁、ユダヤ人としてのアイデンティティの主張などは声高に聞こえてこないはずなのだ。まず本国では親や家族によって情報を操作され、イギリス入国後は新しい環境に適応するために過去をゆっくり振り返る余裕などない。困難な体験とそれに対する論理的な認識や前後関係の把握とのあいだに時差が大きく、その間に個人的でごく限られた状況に関する記憶だけが、時に肥大化して残っていく。それは主人公二人のドイツ時代の回想のあり方やその後の心情とぴったり一致している。

こうしてブルックナーは正確に二人のキングーを描き出したが、そこには二重になった慎みが加味されていた。まず、彼女には当然難民としての経験がなく、近い身内をホロコーストで失ってはいない。したがって、祖父母を収容所で亡くした Eva Figs の文章に見られるような怒りとは無縁なのである。そして、感情を排した冷静な観察者でありながら、ブルックナーは必要以上に書かず、すべてを明らかにしない。無害な子ども時代の回想の直後に、まるで注

釈でも加えるように苛酷な真相を付け足したりはしないのだ。彼女が拒否したのは“emplotment” (Skinner 137) ではなく、全知全能の語り手の視点である。Figs は、あとに残してきた祖父母について語るとき“Some things, many things, had been left too late. It was better not to talk about them too much, not then, not even half a lifetime later. To do so was to arouse feelings of guilt and recrimination, even against the dead, which could never be stilled.” (19) と述べている。家族を残して亡命した者には、時の流れにさえ癒すことのできない罪悪感と迫害者への非難の感情がある。すべてを語りつくすことで、それをかきたてるようなことがあってはならないのだ。

さらに、ハートマンがフィビッヒに“You are not a survivor. You are a latecomer.” (141) と言うとき、そこにも開戦前夜に渡英したユダヤ人に対するブルックナーの配慮が感じられる。彼らを「生き残り」と呼べば、それができなかった「死者」の存在をどうしても思い起こさせ、survivor guilt を呼び覚ましてしまう。強制収容所からの生還者への理想も生まれる。ブルックナーはここでははっきり一線をひいているのだ。彼女はハートマンのこの言葉を通して、ホロコーストについては一切言及する意志はないと宣言しているのである。しかもそれはアッペルフエルトの計算された沈黙ではなく、文字通りの沈黙なのだ。彼女は自分がホロコーストを語るべき作家ではないことをはっきり自覚している。ユダヤ人作家の一人と数えられることで、この *Latecomers* を“an extremely somber Holocaust piece” (Malcolm 89) などと評されるのは彼女の本意ではない。かつてブルックナーは Olga Kenyon に“Did your parents talk about their past or the holocaust?” と質問されたとき“No, and I’m grateful for that.” と答えている (10)。彼女はホロコーストを自らの問題として安易に引き受けることを一貫して拒んでいるのだった。

一方、先の *The Club* に対するブルックナーの書評を読めば、彼女が latecomers を“refugees from Nazism, who had already profited from German liberalism both in culture and worship” (Review) と認識していることがわかる。英国ユダヤ人全体の中で、開戦直前にナチズムから逃れてきた人々は独自の存在で、経済界ではトップに立てなかったものの、イギリスの芸術・文化全

般への貢献度は大変高かった (Brook 399)。それより先にやってきた移民の家庭に育ったブルックナーに、latecomers 全体に対する畏敬の念、あるいはコンプレックスが皆無だったとは思われない。そして同化の労苦を直に体験した世代である彼らに対して、祖父母、両親の築いた土台をそのまま受け継いだ2世として、ある種の引け目を感じていた可能性がある。先の書評の中にも、“At the bottom of the heap are the immigrants of the 1880s and 1890s, a group looked upon with disfavour by Gentile and established Jew alike” (Review. 下線筆者) という記述が見られる。英国ユダヤ人内部における階級意識がブルックナーにあって、それも *Latecomers* の語りに微妙な影を落としていると考えられる。たとえば、ハートマンとフィビッチが戦後始めたグリーティングカードの仕事については “the absurdity of their trade: greeting cards, of a cruel and tasteless nature”, その後展開していったコピー機関連の事業のことは “anathema” (8) と表現されているのは、二人の latecomers にとって、この種のビジネスが経済的安定をもたらす以外に何ら価値が認められない類のものであることをあらわしている。フィビッチが当初もくろんだ出版業のように、彼らには他にふさわしい仕事があることを示唆しているのだ。また、ハートマン夫妻のプチブル的なライフスタイルを時に揶揄して描くところには、彼らがとりあえず築き上げた経済基盤は、決して彼らの究極の目標足り得ないのだという作家の評価を反映している。

小説の最後はフィビッチが息子トトに宛てた手紙で結ばれている。そこには自筆の回想録が同封されるが、トトに送付する以外にもう一部写しをとり、それは金庫にしまってハートマンが管理するという。さらに、もしトトが送られたノートが無価値だと思えば「どこかへおいてきてもいいし、捨ててしまってもかまわない」(237) と書き添えている。ハートマンとフィビッチにとっては遺言書のように大切な文書も、その扱いについてはトトの判断にまかせ、彼らの過去が重荷とならないように配慮しているのだ。

手紙の中では、フィビッチの両親の名が Manfred と Rosa であることが初めて明かされ、二人のことは回想録に記されているという。また、手紙の末尾の

署名からフィビッチのミドルネームがマンフレッドであることも判明する。トトはフィビッチのファーストネーム Thomas を受け継いでいる。親の名前の継承は家系が存続している証であり、歴史の中で一度は断絶するかと思われた家族の系譜は、フィビッチの精神的な葛藤を経て復元されたのだ。かつてトトに子守唄がわりに読み聞かせた Byron の詩を引用しながら、フィビッチは以下のように綴る。

Do you remember “battle’s magnificently stern array”? I was never able to capture that spirit myself. Some battles, however, are fought in the mind, and sometimes won there. (237-8)

フィビッチはユダヤ人であるがゆえに故国と両親を失った。その試練を長年にわたる「心の中のたたかい」を経て克服し、「人生が与えるもの」“what his life has to offer” (Review) を曇りのない眼差しで見据えている。“I wanted in particular to tell you what a good life it has been, I have been blessed with everything a man desires.... Marry, have children, and you will know my joy.” (237. 下線筆者) と我が子に語るフィビッチにとって、ユダヤ人、非ユダヤ人あるいはイギリス人といった区別は意味を成さないように思われる。彼は最後に、ブルックナーが考える、「あらゆるステレオタイプを免れた理想的なユダヤ人」(Review) の境地に達しているのだ。

作品の最終行がフィビッチのフルネームの署名であることは、彼の自己が確立したことをあらわすが、実際のキンダーにとって、自ら名乗りをあげることが重要な意味をもっていたことに照応する。さらに、渡英後半世紀近く、表面上は平穏な市民生活を営みながらも、懊悩と葛藤を経て次世代に回想録を残すというフィビッチの姿は「キンダートランスポート文学」誕生への過程をそのまま体現していると見ることもできる。*Into the Arms of Strangers* の序文では、キンダーの心情に関して次のように記されている。

Some found it extremely painful to recover the memory of what they had

suffered, let alone articulate it, while others who felt it only too keenly did not want to 'burden' their sons and daughters with a horrific story. Others believed it was their duty to pass on the tale of the Kindertransport, to ensure that the hatred and the generosity would never be forgotten and that lessons would be learned. This is perhaps the greatest legacy of the Kindertransport. (19)

体験を語りたい、あるいは語るべきだと思っても語れないという葛藤の末、多くのキンダーが手記や体験に基づく小説の発表に踏み切った。キンダー50年間の歩みは、もしも当事者が自ら名乗りをあげていなければ、英国ユダヤ人のごく限られた集団の中だけで語り継がれていたはずである。ブルックナーはそれをいち早く小説の題材に選んだ。そして彼女はあくまで第三者として敬意を表しつつ、二人の幼かったユダヤ人が喪失感や疎外感を克服しながらイギリスという国に根付いていく過程を描いたのである。

注

¹ 木畑和子『キンダートランスポート』（東京：成文堂、1992）は日本で出ている数少ないキンダートランスポートに関する文献の一つである。これ以外では Mark J. Harris, et al., eds., *Into the Arms of Strangers: Stories of the Kindertransport* (New York: Bloomsbury, 2000); Ann L. Fox, et al., eds., *Ten Thousand Children: True Stories Told by Children Who Escaped the Holocaust on the Kindertransport* (New Jersey: Behrman, 1999); Barry Turner, ... *And the Policeman Smiled* (London: Bloomsbury, 1990) の3冊がキンダートランスポートの概要を知るのに適している。

² かつてのキンダーが記した回想録（集）としては、上記以外に、Berta Leverton and Shumuel Lowerson eds., *I Came Alone: The Stories of Kindertransport* (Sussex: Book Guild, 1990); Geoffrey Hartman, *The Longest Shadow: In the Aftermath of the Holocaust* (New York: Palgrave Macmillan, 1996); Olga Levy Drucker, *Kindertransport* (New York: Henry Holt, 1992) が50周年記念集会の後出版され

ている。なお、渡英後 25 年の段階で、Karen Gerson (Lotte Kramer, Gerda Mayerらと共に、早くも 60 年代からキングダートランスポートを題材とする詩作品を発表している) が *We Came as Children: A Collective Autobiography* (New York: Hartcourt, 1966) を編集しているが、手記はすべて無記名であるし、図版も、当時の身分証明書の写真が一枚だけ掲載されており、実際のキングダの姿が見えてこないつくりになっている。一方、キングダートランスポート体験者以外の作家によるフィクションとしては、本稿で採り上げたブルックナーの *Latecomers* と、Daiane Samuels の戯曲 *Kindertransport* (London: Nick Hern, 1995)、W. G. ゼーバルト『アウステルリッツ』(東京: 白水社, 2003) が際立っている。

³ David Patterson, Alan L. Berger らが編集した *Encyclopedia of Holocaust Literature* (Westport: Oryx, 2002) には児童文学作家 Irene N. Watts の *Good-bye Marianne* (Tront: Tundra, 1998) と Diane Samuels の *Kindertransport* が載っている。

⁴ ブルックナー作品全般の語りに関しては Sadler viii-x, Malcolm 14-15 参照。*Latecomers* の語りについては Skinner が “refusal of emplotment” (19-20, 137) をその特徴としている。

⁵ 主人公アウステルリッツは、1939 年夏、4 歳でチェコからキングダートランスポートに加わるが、それに関する記憶が一切ないまま養父母のもとで成長する。長じて建築史の研究に携わるが、中でも駅の建造物にとりつかれ、それを自ら「駅狂い」(“Bahnhofsmanie”) と称する。やがて、リバプールストリート駅(ユダヤ人が多く住むイーストエンドへの入り口) 構内の待合室で、かつて自分をそこで迎えてくれた養父母の幻影を見てすべてを思い出す。その決定的瞬間は彼が Harwich からの臨港列車が着くホームのベンチに腰掛けたことがきっかけで訪れるが、ハリッジはキングダがヨーロッパからイギリスに上陸したときに降り立った港である。アウステルリッツといえば、ナポレオン戦争に関わる古戦場であるが、パリの駅の名前でもある。モーリヤックがエリ・ウィーゼルの『夜』に寄せた序文に、パリ 13 区にある gare d'Austerlitz をめぐるエピソードが記されている。「あの暗澹たる歳月に見たかななる光景も、オーステルリッツ駅での、ユダヤ人の子どもをいっぱい詰めた、あの幾台かの貨車のありさまほどに私の心に深く刻み込まれはしなかった……」とモーリヤックが語ると、当時まだ無名だったエリ・ウィーゼルは、「わたしはそのなかのひとりです」と答えたのだった。(フランソワ・モーリヤック「序文」エリ・ウィーゼル著 村上光彦訳『夜』(東京: みすず書房, 1995)) つまり、アウステルリッツという主人公の名前そのものに、親と引き離されて連れ去られる

ユダヤ人の子どもたちの姿が焼き付いている。また、主人公の帰郷の場面を読むと、忘れていたはずのチェコ語がいきなりわかるようになったり、かつての母の親友に再会して両親の消息を知ることができたりする。

⁶ David Galef, “You Are Not What You Eat: Anita Brookner’s Dilemma,” *Journal of Popular Culture* 28, 3 (1994): 1-7 及び Skinner 25-27 参照。

⁷ ブルックナーの出自については、Olga Kenyon と Shusha Guppy による本人へのインタビューを主に参考にした。

⁸ Kerbel はこのエピソードを自身が編集した *Jewish Writers of the Twentieth Century* (New York: Fitzroy Dearborn, 2003) の “Anita Brookner” の項目と *The Jewish Women’s Writing of the 1990s and Beyond* (2003 年 Mainz 大学で開かれた学会。http://fb14.uni-mainz.de/projects/jewconf/ を参照) に提出した “Anita Brookner and the Embarrassment of Being Jewish” (以下 “Embarrassment”) の両方に記している。

⁹ アッペルフエルド作品にみられる「露呈と隠蔽」の問題、あるいは『バーデンハイム 1939』に関しては、宮島康子「沈黙と表白の狭間・アーロンアッペルフエルド」『ホロコーストとユダヤ系文学』日本マラマッド協会編(大阪：大阪教育図書, 2000) 149-67 参照。

引用文献

- Brook, Stephen, *The Club: The Jews of Modern Britain*. London: Constable, 1989.
- Brookner, Anita, *Latecomers*. 1988. special overseas ed. London: Grafton, 1989.
- . “Aches and Pains of Assimilation.” Rev. of *The Club: The Jews of Modern Britain*, by Stephen Brook. *Observer* 23 April 1989: 44.
- Cheyette Bryan, ed. *Contemporary Jewish Writing in Britain and Ireland: An Anthology*. Lincoln: U of Nebraska P, 1998.
- Figs, Eva. *Little Eden: Child at War*. New York: Persea, 1978.
- Fox, Anne L., et al. *Ten Thousand Children: True Stories Told by Children Who Escaped the Holocaust on the Kindertransport*. New Jersey: Behrman, 1999.
- Gerson, Karen, ed. *We Came as Children: A Collective Autobiography*. New York: Hartcourt, 1966.

- Guppy, Shusha. "Interview: The Art of Fiction XCVII: Anita Brookner." *Paris Review* 109 (1987): 147-69.
- Haffenden, John. *Novelists in Interview*. London: Methuen, 1985.
- Harris, Mark J., et al. *Into the Arms of Strangers: Stories of the Kindertransport*. New York: Bloomsbury, 2000.
- Kenyon, Olga. ed. *Women Writers Talk: Interviews with 10 Women Writers*. New York: Carroll, 1990.
- Kerbel, Sorrel, "Anita Brookner." *Jewish Writers of the Twentieth Century*. Ed. Sorrel Kerbel. London: Fitzroy Dearborn, 2003.
- . "Anita Brookner and the Embarrassment of Being Jewish." *Jewish Women's Writing of the 1990s and Beyond in Great Britain and the United States*. Ed. Bernhard Reitz, et al. Johannes Gutenberg-University Mainz. Mainz, 30 Jan to 2 Feb 2003 <<http://fb14.uni-mainz.de/projects/jewconf/>>.
- 木畑和子 『キングダートランスポート』。東京：成文堂，1992。
- Malcolm, Cheryl A. *Understanding Anita Brookner*. South Carolina: U of South Carolina P, 2002.
- Sadler, Lynn V. *Anita Brookner*. Boston: G. K. Hall, 1990.
- ゼーバルト W. G. 『アウステルリッツ』，鈴木仁子訳，東京：白水社，2003。
- Skinner, John. *The Fictions of Anita Brookner: Illusion of Romance*. London: Macmillan, 1992.
- Turner, Barry. ... *And the Policeman Smiled*. London: Bloomsbury, 1990.

Synopsis

Anita Brookner's *Latecomers* among
Literary Responses to Kindertransport
Tetsuko Kouno

Before World War II began, nearly 10,000 Jewish children were transported from Nazi Germany to England unaccompanied by their parents. This movement is called Kindertransport. Almost 50 years after this historical event many ex-kinder began coming out to try to find their voices. Various kinds of writings about Kindertransport came into existence during the 90s. They include both fiction and non-fiction and their genre varies from journalistic article to poetry or drama. For the purpose of this research we will define these literary responses as Kindertransport Literature.

Anita Brookner's *Latecomers*, published in 1988, can be regarded as one of the earliest examples of Kindertransport Literature, though it doesn't treat the theme of Kindertransport overtly. The plot is full of obscurity and anticlimaxes in the scenes concerning the past or identity of two leading characters as Jewish exiles. The object of this research is to analyze *Latecomers* with its historical background to explore its possibility as one of the pioneering works of Kindertransport Literature.

The analysis is based on examining how the most common topics in Kindertransport Literature are treated in *Latecomers*. These topics are memories about their parents or the life in Germany before transportation, experiences in railway stations, the life in Britain during the war, the life after the war and marriage, survivor guilt, and overcoming the past.

Two leading characters Hartman and Fibich accidentally have the same first name, Thomas but their attitudes towards life as exiles seem completely different. Hartman is consistently present- or future-oriented while Fibich is almost always defeated by his past as a German Jew. Fibich leaves for Berlin to confirm his identity but the consequences of his journey

remain ambiguous. Despite the clumsy process of his search he manages to reach his final recognition: his home is eternally elsewhere. He approves of his own existence as subject to continual change.

The result of analysis suggests a striking accuracy and realism in Brookner's portrayal of two exiles. The balance between obscurity and articulateness in her narrative mirrors complicated psychology of real ex-kinder, though some critics relate her tendency to veil "Jewishness" to her reluctance to come out as an Anglo-Jewish writer.

In addition to her complete realism and understanding for the psychology of exile children, Brookner's origin as a Polish Jew has a subtle but important effect in her writing though she doesn't want to be regarded as such. She has modesty as an outsider who has no experience as a latecomer and a survivor of the Holocaust. When Hartman says to Fibich, "You are not a survivor. You are a latecomer, like me," he declares their stance as refugees and distinguishes themselves from victims of the Holocaust. Here Brookner manifests her rejection to mention the suffering of Holocaust survivors, trying to shut off the survivor guilt. She doesn't intend the same special effect employed by Aharon Appelfeld in *Badenheim 1939*. Her silence is genuine, not strategic.

In her review to *The Club: The Jews of Modern Britain* Brookner refers to latecomers as "the refugees from Nazism", while she belongs to the family who arrived earlier than they did. The refugees from Nazi Europe have made a great contribution to British artistic and intellectual life in the 20th century and Anita Brookner may have respect or a slight complex towards them. She emphasizes the absurdity of the protagonists' trade with greeting cards because she thinks more culturally significant business would be suitable for them. She doesn't simply affirm the affluence brought by their trade. Her evaluation for their economical success is reflected in her satirical description of Hartman's petty-bourgeois way of life.

When *Latecomers* was published the historical facts about Kindertransport had not been well known. Anita Brookner was so original as to take

up them in her novel. As an insider of the Anglo-Jewish society she has a penetrating insight into the circumstances and psychology of latecomers but she describes it detachedly with reserve and respect towards them.